◉韓国政府は12名の留学生らを全員即時釈放せよ！
◉日本政府は12名の留学生らの人権回復に努力せよ！

11.22通信

1981年 11月22日 第33号
1部100円＋カンパ
年8回発行
振替口座
大阪4649・摂津富田教会

編集・発行所
「11・22在日韓国人留学生・青年不当逮捕者を救援する会」
大阪府高槻市富田町3－7－25
摂津富田教会（〒569）
電話 0726－96－2562

相次ぎデッチ上げ

早急な救援の取組みを

陳利則氏は7年判決・4人逮捕

前朴政権よりも掛かに苛酷な民衆収奪の弾圧体制を布く全斗煥政権は、国内の緊張状態を持続させ、学生や宗教人の民主化勢力を根絶やしにする方針の一環として、在日韓国人を直接・関接に巻き込んだ「スパイ事件」を年初より繰り返しデッチ上げてきたが、さらに追い打ちをかけるように、この十月・十一月にも新たに、二件、四人の在日韓国人留学生が拘束された。留学生の逮捕事件は、七七年の「柳兄弟事件」以来四年ぶり。これら相次ぐデッチ上げ事件に、国内の在日韓国人政治犯救援会は一様に、抗議と怒りの声を挙げる一方、「救援運動への重大な挑戦である」として、間髪を入れず早急な救援の取り組みを開始した。

一方、十一月十七日には、第一審で孫裕炯氏に暴悪な死刑判決が言い渡された。加えて長期拘禁の政治犯は、姜宇奎、崔哲教両死刑囚に象徴されるように健康悪化が著しく顕在化している。このように、在日韓国人政治犯救援運動にとって険難な道程が依然として続くが、われわれはいまこそその真骨頂を試されているのだ！政治犯の直面する新たな試練を打ち砕き、全員の釈放まで、救援の手綱を断じてゆるめてはならない！

金泰洪氏

『金泰洪事件』

去る十月十三日、国軍保安司令部（CIC）により発表された。

金泰洪氏（25）＝神戸市、延世大商経学部四年＝は、友人の延世大生ら四人と共に逮捕され、その主犯格とされた。

主な容疑は、①四年余りの韓国留学中、一六〇万円のスパイ資金を受けた。②幼時期、兄と共に北朝鮮に渡り、その後日本に帰ってきた。③留学中に哲学、経済学等の不穏書籍を韓国に持ち込み、友人らに左傾思想を助長した。④本年一月末から一週間、北朝鮮に渡りスパイ訓練を受けた、等である。

これに対して、家族や友人らは全体がひどいデッチ上げの作文だとし、①は、大学の授業料と下宿等の生活資金で、一部は家族が補助したが、殆ど本人が夏休みにアルバイトで稼いだ。②小学校から高校まで神戸市内の学校で、そういう事実は全くない。③経済学部なので、友人に頼まれよく書籍を持っていったが、いずれも書店などで購入したものだ。④その期間東京の食堂でアルバイトをしていたので、現在友人やその店を探している、と反論している。

なお、金氏の逮捕時期は不明だが、夏休み後の八月二十三日に渡韓したが、その際授業や生活費として持参した二〇万円がそっくりCICに押収されていることからその直後ではないかと思われる。事件発表の二週間ほど前から、金氏から家族のもとに、服や下着を大阪空港のKALのカウンターに持って行くよう電話があったという。

現在、金氏はソウル拘置所に収監されており、「11・22救援会」では、下着、毛布、お金などをこのほど差し入れた。収監番号は九八番。

◇ ◇

金泰洪氏逮捕の一報を受けて、兵庫県在住の救援関係者が一斉に行動を開始、情報収集や救援会結成に向けて取り組んでいる。

去る十一月十八日、神戸市内の県民会館で、金氏の恩師や教職員組合、それに救援関係者ら四十数名が集まり、「金泰洪氏を救う会」（仮称）の準備会を発足させた。

『陳利則事件』

陳利則氏（23）＝徳島県小松島市、ソウル大在外国民教育院生＝は、去る十一月六日、NSP（国家安全企画部、旧CIA）により他の二事件と共に発表された。

しかし、許せないことは、その四日後に一審判決懲役七年が出たということである。即ち五月末の逮捕以来、一切を闇の中に葬り込められるところだった。

陳氏の裁判は八月頃から始まり、求刑は無期であった。主要な容疑は、青瓦台正門と北岳山一帯の警備状況、学生の軍事訓練の実態、10・26事態前後の学園の状況、等の国家機密を深知、報告したとされているが、このいずれも、ソウルでは誰もが見聞できるもので、『国家機密』といえるだろうか。

また、陳氏は僅か一年の滞在期間の内、ノイローゼ（精神不安）で日本とソウルの病院で入退院を繰り返しており、実際に授業に出たのは数カ月にしかならない。

不安定な精神状況下の彼を無理矢理デッチ上げに使ったことは人道的見地からも断じて許されない。

現在、出身の広島大関係者や「11・22救援会」等で、彼の救援を本格的に取り組む体制作りが進行している。

なお収監番号は一一七番。

『統革党事件』

十一月十一日、CICは、在日韓国人の李憲治氏（29）＝大阪市、三星電子勤務＝と李珠光氏（28）＝名古屋市、民団職員＝の逮捕を発表した。

二氏の経歴などの詳細は不明だが、発表によると、李憲治氏は社内で、李珠光氏は出身の高麗大で地下党を構築しようとしたとされている。

留意すべきことは、李珠光氏の場合、「11・22事件」で拘束され、本年八月釈放された李秀熙氏とも関連ありとされていることだ。李秀熙氏は現在ソウルに滞在しており、彼も何らかの取調べを受けたのではと救援会では危惧している。ソウル拘置所の収監番号は、李憲治氏は一七〇番、李珠光氏は七〇番。（詳しい報告は次号で）

《金泰洪（キム・テホン）》

一九五六年生まれ、二五才。現住所は神戸市中央区。春日小、市合中、東神戸高（一年のみ）、市立赤塚山高校を七七年卒業。同年、ソウル大付属国民教育院に留学。翌七八年、延世大学商経学部経済学科入学。逮捕時（本年八月末）には四年生。

《陳利則（チン・リチク）》

一九五八年生まれ、二三才。現住所は、小松島市外開。徳島大付属中、徳島市立高を経て、七六年広島大理学部数学科に入学。八〇年卒業と同時にソウル大在外国民教育院に留学。入学後、精神不安でソウル市内の病院に入院。七月に帰日。同年十月、広大担当教官に小松島から電話を入れているが、やはり精神不安がうかがえたという。出席日数が足りず、教育院は留年となったが学業継続が無理（？）なため、本年五月末、母親と共に下宿に荷物をまとめに赴いたところ逮捕された。去る十一月十日、一審で七年が判決された。

解説

韓国治安当局の相次ぐ「スパイ事件」摘発は、異常というより常軌を逸しているとしかいいようがない。例年一～三件位のペースで発表されるのだが、今年になって発表回数九回、事件数十四、逮捕者六一名、関連拘束者は二百名近い。呆れ返るような数字である。NSP、CIC、それに治安本部（警察の公安部門）までが乗り出した〝摘発攻勢〟の特徴点を記そう。まず第一に、殆どが海外、とりわけ日本在住の韓国人を直接、間接に巻きこんでいることだ。在日僑胞で拘束されたのは、「金栗萬事件」の金光信氏、「孫裕炯事件」の孫裕炯氏、それに今回の三事件の四人を合わせ、五件、六人となっている。その他日本の密出入国者、二名、在日僑胞から事業資金を貰った容疑の者が二人ある。

これらの発表は、いずれも韓国内では大々的に取り上げられている。その理由は、国内では在日が絡むと容易に事件デッチ上げを信じ易いという背景があるからだ。第二に、事件内容が相も変わらず荒唐無稽でズサンだということだ。陳利則氏のケースなど、取調べ自体が人権無視といわねばならない。証拠品は、パスポート、ラジオ、カメラ、お金（全てスパイ資金になる）、書籍、等の一般的なものばかりだ。また、信じられないような話もある。「統革党事件」の李珠光氏は、僑胞観光団を引率し、滞韓中に、六年前に在籍した高麗大で地下党を再建しようとして、十月九日逮捕されたという。わずか数日、それも団体を引率して、どれほどの時間でこんなことが出来るのだろうか。第三に、事件デッチ上げが、韓国内の激化する学生たちの動きを牽制しようとしているのは明らかである。金泰洪氏は、延世大の十月一日の示威行動を見すえた発表であろう。また学生たちのビラ内容が激しいものになっていることを在日―北の影響というように信じこませる狙いもある。

韓国内では依然として、政権に反対する勢力が、様々な運動を展開し、対する当局の弾圧も一層激烈なものとなっている。運動つぶしの一手段として、「スパイ事件」は今後も続くだろうが、そのようなデッチ上げを決して許さないというわれわれの力量を彼らに示さなければならない。（QN生）

孫裕炯氏

暴悪な死刑判決！

ソウル地裁

孫裕炯氏

去る十一月十七日、ソウル地裁は、在日韓国人実業家孫裕炯氏（52）＝大阪市生野区＝に暴悪な死刑判決を下した。また、関連者として同時に起訴されていた孫氏の叔父孫鍾奎氏に懲役二年、従弟孫裕升、孫裕培両氏には一年の実刑判決が言い渡された。

孫氏への判決理由として、裁判長は「起訴状の否定は客観的でない。検察調書で認めているのだから、自白の任意性を争っても意味がない」と、孫氏の必死の主張を無視し、長期間の脅迫によって作りあげられた調書を全面的に受け入れるという非道なものであった。

孫氏は、白と紺の韓服の上下に両手錠、腰縄で現れ、判決前は緊張の色を隠せないようであったが、事前に極刑を予想していたせいか思ったほど動揺した様子は見られなかった。

判決後、引き上げる孫氏に、救援会員らが、「頑張って下さい」「必ず控訴して下さい」と語りかけると、大きく頷いていた。

孫裕炯氏は、本年四月にNSPによりソウルで逮捕され、九月二十二日から第一審が始まり、その後事実審理を殆どしないスピード裁判で、五回目の去る十月二十七日に死刑求刑が出されていた。

◇ ◇

「孫氏に死刑判決！」の一報が入ると同時に、「孫裕炯氏を救う会」をはじめ各救援会、支援団体は一斉に抗議行動に起ち上がった。

十七日正午、大阪生野区民センターで記者会見が持たれ、抗議声明が力強く読み上げられた。席上、孫氏の二男明弘氏（23）は「ショックだ。父の命を救うために、皆さんの声を強めて下さい」と沈痛な面持ちで語った。

また午後には韓国総領事館に抗議行動に向かったほか、同日夕には各ターミナルで、約一〇〇人がビラ入れを行った。さらに、十九日には、東成会館で約一二〇人が結集、緊急抗議集会を開いた。

700人結集！

9・22集会

去る九月二十二日、大阪生野区の生野区民センターにおいて「孫裕炯氏を支援する会」（代表、妹尾活夫）結成集会が開かれ、地域の組合員、在日韓国人、それに東京、名古屋をはじめとする全国各地の救援会員ら七〇〇名が結集した。

9.22結成集会、生野区民センターにて

年末カンパを

相次ぎ留学生がデッチ上げられるなど、救援運動は増々困難な度合いを深めております。「11・22救援会」は、今冬も差し入れ渡韓団を派遣し、獄中の友人に下着や書籍、セーター等を入れる予定です。

つきましては、皆さまに年末一時金カンパを切にお願いするものです。マイナス二〇度の酷寒の牢獄で春を待ち受ける彼らに切なるカンパをぜひお願いします。

（送り先き、郵便振替 大阪 4649 摂津富田教会）

断鎖

九月三〇日深夜、八八年オリンピックがソウルに決定した瞬間、アナウンサーの困惑した表情が印象的であった。名古屋開催が有力視されていたが、目的のため手段を選ばない韓国外交のモーレツ攻勢を知る関係者などは、土壇場の逆転もありうると考えていたが、案の定であった★オリンピックの形骸化が叫ばれて久しい。ことに先年のモスクワ五輪では、米国の露骨な政治介入で、小骨も抜かれるというテイタラクであった。いまさらオリンピックなどという声も根強いが〝先進国〟の仲間入りを果たせぬ国にとっては、「ノーベル賞」と並んで、まだまだ魅力的な代物らしい★韓国人のスポーツ好きはつとに知られているが、それだけでソウルオリンピックを招致したわけではあるまい。いらぬお節介かも知れないが、韓国はオリンピックを開くほどの余裕があるのだろうか？借款返済に汲汲としているさ中、主要施設に二〇億ドル、関連事業に百億ドルの資金捻出をどうするか、現地の新聞も疑念を挟んでいる。それだけでない。政府に批判的な宗教人、労働者、学生を拷問にかけ投獄するファッショ体制下、挙国一致で平穏無事に開催に漕ぎつけられるだろうか。スポーツ取材の記者も容易に入国させない半鎖国体質もどう改めるのであろうか。また「北の脅威」をことあるごとに喧伝し、市民をがんじがらめに抑圧した「戦時下」政策はどう説明するのだろうか。あれは嘘で、韓国は平和なのですと釈明するか、それとも競技場の周囲にトーチカを構築、戦車を並べて開催を強行するのだろうか★先頃、韓国外大と慶熙大は共同宣言で「民族経済の危機状況のもとで、五輪誘致という妄想をし、対外的には弱体政権を宣伝し、国民を時代錯誤の全体主義の落とし穴に陥入れようとしている」と断じ、デモに起ちあがったという★『民族の祭典』という映画を御存知だろうか。一九三六年、ヒトラーは、ベルリンで開かれたオリンピックを最大限に利用、ファッショ独裁体制を強化し、一気に大戦へと突走った。歴史はまたもや繰り返されるのか。

救援

―10・2対政府交渉―

政府の壁依然厚し

去る十月二日、「議員懇」主催の対政府交渉が、衆議院議員会館で行われた。

法務省入管局からは竹内資格審査課長、宮崎入管審査課長が出席し、以下のように答えた。

①これまで帰日した「政治犯」は十八名。特在三年の二名を除き、他は同一年。うち六名の一般永住申請を、昨年十一、十二月にかけて受理、現在鋭意検討中である。十年間の滞在実績が一般永住の条件だが、協定永住等、出国前の在留資格と新規入国後の滞在日数をどう扱うか考慮している。

判決文については、再入国期限内に帰日できなかった事情を説明する資料として、任意に提出してもらっている。

②「政治犯」家族が国連へ行くに際し、入管局長証明書は発給できない。今後の措置については何も言えない。

続いて外務省の小倉北東アジア課長が次のように答えた。

①在日韓国人「政治犯」問題は外相会談で取り上げられなかったが、六月から八月に八度にわたり非公式な申し入れを行った。

②崔哲教氏ら健康悪化の「政治犯」は承知している。治療についても具体的に取り組んできた。

「政治犯」本人と家族や友人との面会も、協力する。

なお、この交渉では、「議員懇」の稲葉誠一会長、佐藤誼事務局長をはじめ、救援会、家族らが多数参加した。

柳英数氏 肋膜炎再発か？

光州矯導所に収監されている柳英数氏（32）が、さる十月中旬、家族との約三時間の特別面会を許された。

懸念されていた結核性肋膜炎はまだ完治しておらず、朝起きた時血痰を吐き胸部の痛みも残っていると訴えている。しかし、8・15特赦で二〇年に減刑されたことから、それまでの比較的きつい作業（馬山への移監前）から園芸の軽作業に就くことができ、外見上は陽に焼けて元気そうだったと伝えられている。

柳氏は、「気長にやります。二〇年ぐらい何でもない」と強気の姿勢を明らかにしている。

一方で、″社会醇化教育″と称して一般囚へも締めつけが拡大強化されるなど、矯導所全体の状況は決して楽観できるものではない、と内部の厳しい様子ももらしていた。

「柳英数氏を救う会」は、現在柳氏の即時釈放を求める署名と、病気治療の要請葉書きを大衆的に取り組んでいるが、このほど名古屋においても、和歌山、立命館大学、大阪に続く四番目の救援会が発足し、着実な運動の前進をかちとっている。

さる十一月八日、名古屋市昭和区の名古屋市公会堂において、約三〇名が参加し、「柳英数氏を支援する名古屋の会」（代表・伊藤俊郎）の発足集会が持たれた。

帰日は12月 特赦の8人

光復節特赦で釈放された在日政治犯八氏は、当初十月中にも帰日の予定であったが、手続きが遅れたため、十二月中旬前後になることが確実となった。

ソウルの消息筋の話によると、韓国政府のパスポート発給が遅れていたが、十一月になってやっと交付され、現在日本大使館に入国査証を申請中だという。

また同消息筋によると、ソウル滞在の帰日政治犯数人が、釈放に尽力した尹潽善元大統領邸を表敬訪問した。尹氏は、一行を歓迎し、長期の拘留をねぎらったという。

大邱の金五子さん 減刑を喜ぶ

8・15特赦で無期懲役から二〇年に減刑された金五子さん（30）＝大邱矯導所在監＝は、先日家族宛てに手紙で次のように今の気持ちを伝えてきている。

「何と言っていいのかわからないくらい嬉しい。喜びの気持ちで一杯です」「いつの日か釈放されたならば、日本へ戻り北海道あたりを一人でゆっくりと旅行してみたい」。

精神的なゆとりさえ文面から感じとられ、救援会も安心している。

しかし、冷え症の彼女にとってこれからの冬場に最も苦痛を強いられる時。酷寒時の差し入れなど、準備を急いでいる。

求刑公判傍聴記

孫氏 毅然とした姿勢 法廷に呻きの涙満つ

十月二十五日、金浦空港に降り立った時は、思わずブルッと震えた。まだ大丈夫だろうとコートを持参しなかったのだが、ここはもう秋というより初冬のたたずまいである。

相変わらずの慌ただしいソウルの街だが、秋の深まりにつれ、そこはかとない哀愁が感じられるようであった。

その後は、弁護士との打ち合わせ、差し入れ、マスコミ回わり等、あっという間の二日間であった。

弁護士と最終弁論についての打ち合わせを記そう。

家族の要望として、孫さんの″自白″が親戚の三人を救うため不如意になされたことを強調してほしい、等を伝えた。これに対して、太倫基弁護士は、「量刑を下げるためには、そういう情状論だけでは弱い。″スパイ″でないことをもっと強調する必要がある」と、思いがけない答えが返ってきた。いまの韓国では、そういう反論が自由に行えるとは想像しなかったからだ。

公判の十月二十七日は、昼過ぎからどんよりと重い雲が垂れこめていた。

午後一時から裁判所の構内で待機していたが、一向に孫さんらが来る気配がなかった。後で分かったことだが、孫さんは既に午前中に着き、午後二時からの開廷を控え室で待っていたのであった。

午後二時、公判が始まった。その時、空港に到着したばかりのEさんが息せききって駆けつけてきた。傍聴席には、関連者として起訴された三人の親戚の家族たちが、三十人ほど詰めかけ、不安な中で固ずを飲んで成り行きを見守っていた。

孫さんは、白い韓国服で両手を縛られ、法廷がうす暗くてよく分からなかったが、顔色はそんなに悪くないようであった。

開廷と同時に検事の論告が始まった。予め用意された文書を、顔をあげることもなく猛烈なスピードで読み出した。二〇分程で読み了えると、四人の被告の方を見やりながら「見せしめとして、孫裕炯に死刑、鍾奎に五年、裕升、裕培に三年を求刑する」と述べた。

この箇所だけ私も理解することが出来た。孫さんは、みじろぎもしなかった。若い二人の従弟は心なしかうつ向きかげんであった。

そういうのを無視するかのように、それだけを言い終えると、検事はさっさと退廷してしまった。

これには少なからず驚かされた。次は太弁護士の最終弁論である。

約二十五分続いた弁論は、仲々の熱弁で、次のような内容であった。

①国家機密とされた点は子供でも知っている。これを見聞し、話したことが間諜になるなら、韓国民は全て間諜だ。②刑訴法にある通り、物的証拠がなく自白が唯一の不利な証拠である時は、有罪にはならない筈だ。③被告は取調べ時から、抗ガンワクチンを打つなど健康が優れず、任意に自分の意思を述べられなかった、等。

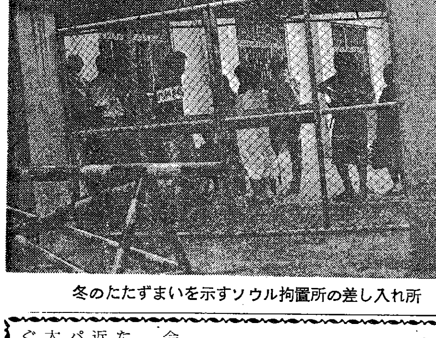
続いて、三人の親戚の弁護士が立ち上がり、「三人は取調べで酷いめにあった。任意の自白に基き調書が作製されたというが、三通とも同一文体で書かれているのは検事の作文だ」と、またまた驚かされるような気骨ある弁論であった。

最後に被告人らの陳述があった。孫さんは緊張のせいか声を少しくぐもらせながら、縛られた両手を振り振り「親戚三人に迷惑をかけ申し訳なく思っている。しかし、包摂するため近づいたことは一切ない」、と。叔父の孫鍾奎氏は、重刑を求刑されたのが予想外だったらしく、かなり動転し、「軍隊で勲章を貰った自分が、こんな大それたことをする筈がない」と同じことを何度も繰り返したため、裁判長から二回ほど強くたしなめられた。この直後、彼の老母らしい人が顔を伏せうめくように泣き出した。

二人の従弟は、ほんの二言、三言述べただけであったのが印象的でさえあった。

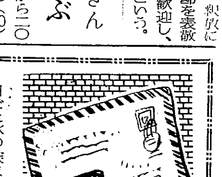
静かな裁判である。三十代前半の三人の判事たちは、既に審理は充分に尽されたというように、時折メモを取るだけで、事務的に聞き流しているという感じであった。

控え室に引き戻される孫さんをEさんと追いかけ、「元気で、頑張って下さい」と声をかけた。孫さんは、振り返ると、「冬の肌着を入れて」とだけ叫び、追い立てられて行った。（ま）



冬のたたずまいを示すソウル拘置所の差し入れ所

ソウル便り



最終走者に喜び

日ごと秋の深まりを感じます。明け方にはもう寒いくらいで、長袖の内衣を取り出すしまつです。例年より半月ほど早い衣替えです。

澄み切った空にはハケではいたようなスジ雲が幾つか見えるだけ。どこまでも真っ青な秋空が続いています。健康は申し分なく、食欲もいつになく旺盛で修養に励んでおります。衣類も新たに差し入れには及びません。決してやせがまんをしているわけでなく、新品が数着残っておりますので。ただ、毛糸の靴下と手錠あて（エンジ色がいいです）（※）をお願いします。韓服は上衣を少し大きめに伸ばしてください。丈が短いと腰が冷えて困ります。

八・一五には在日学生達も少し恵みを受け、せめてもの慰めでした。仲間の学生たちが釈放されたり減刑されたのに、わが子は一体どれだけ悪事を働いたが故に、そのまま手錠に縛られているのかと母は胸を痛まれておられることでしょう。それには及びません。彼らと、私との間にはまたまた差ができたわけですが、私はどこまでもマイ・ペースでやっていくつもりです。

人には各々の道があります。長い道のりを与えられた人もあれば、短い道を受けとった人もいます。神は各自の能力により、その歩むべき道を定められるものです。決して当人に無理な課題をお与えにはなりません。そして一人一人がその道を歩むにふさわしい者となるべく、天主はあらゆる機会をとらえ、私たちを鍛えられるのです。最高刑をもらったのは五名でした。一人ずつ減刑されるが一～二名は最後まで据え置かれるであろうとの予測をしておりました。このひ弱な私に最終走者としてシンガリの役が与えられることに、今は限りない喜びを感じています。身勝手な言い分だとお母さんは思われるかもしれませんが、神の栄光と権能は、弱き者を通じて最もよく現われるものなのです。事態の流れを楽観し、静観いたしましょう。ひたすらマイ・ペースで私も私自身の道のりを歩み続ける覚悟です。最終走者として必ずや完走し、ゴール・インをしてみせます。その日の喜びを、いつの日か、私を支え続けてくださった親友の皆さんと分かちたいものです。お元気で！ただただ、御両親とも長生きされることを祈るばかりです。（一部略）

一九八一年九月十六日

満三〇才の日に　康宗憲

（※死刑囚は四六時中手錠をはめられているため、手錠擦れを防ぐためサポーターを常用している）

11・22通信 縮刷版できる！

『11・22通信』の″縮刷版″が、このほど「大阪資料センター」より刊行の運びとなった。

この″縮刷版″は、七五年の事件発表後に発行された創刊号から本年九月二十二日付けの第三二号まで、総紙面数九二面を収録している。

各面とも、詳細な見出し目録が付けられ、どの記事がどこに出ているか一目瞭然となっている。

また、通信郵送読者のみ送られていた「編集者から読者への手紙」も、巻末に一部掲載されているのが注目される。

政治犯救援運動史上、必須の資料集といえよう。

A3判。110P。一〇〇〇円。送料は三〇〇円。申し込みは、「11・22救援会」事務局まで。なお、限定出版のため部数が少ないので早めにどうぞ！

「大阪の会」発足

釈放の困難な政治犯を主要に支援しようという「救援会」が、このほど大阪で結成された。

この会は、「在日韓国人政治犯を救援する大阪の会」（代表、橋本英資氏）。

「11・22救援大阪連絡会」が、本年五月から、月定の救援学習会を催したが、この参加者の一部が集まり、「積極的に救援を担って行こう」と有志を募ったのが誕生の契機だ。

去る十月二十八日、同会主催の「学習会」が、大阪浪速区の解放センターで開かれ、これをもって正式発足した。

同会では今後、非転向のため先の「光復節特赦」から外された徐兄弟、姜鍾健、金元重ら四氏の救援に尽力したいといっている。

パンフ紹介

″告発！獄中医療″

―韓国獄中医療と救援運動―

B5判、24P、三〇〇円。

（発行 李哲氏を救う大阪の会）

救援運動の途上で編み出された″パンフ″は、これまで百冊近いが、その中でも特筆すべきパンフの誕生である。八月四日、大阪で開かれた″獄中医療をめぐるシンポジウム″の記録だが、帰日政治犯の金東輝、李東石両氏の報告は、単に医療だけに限定したものでなく、韓国獄中実態を暴露したものである。

島津、片木両医師の事実に即した医療上の提言も、非常に含蓄あるものとなっている。

巻末に記された各政治犯の健康状況を調査したアンケートも興味深い。また片木医師が作製した、″健康診断″の目安となるべき「問診表」は、早急に各政治犯に実施したいものである。

紙背から、救援者と被救援者の熱い鼓動が聞こえてくるようなパンフである。申し込みは事務局まで。

指名手配に！「金哲顕事件」の田氏

「金哲顕事件」に関連し、刑期中途で釈放されていた元韓神大生が、今度は別な容疑で″指名手配″中であることが判り、関係者を不安がらせている。

デモを煽動した容疑で、現在も地下潜行中の伝道師は、田炳生氏（31）で今春から韓国全土に他の光州事態関連者ら四〇名とともに写真付きで″指名手配″されている。

田氏は、「金哲顕事件」で懲役五年が確認していたが、八〇年一月、大田矯導所から特赦で釈放された。

そして、昨年五月、ソウルデモで同事件の金明洙氏らと一時拘束されていたが、その後釈放されたとの情報で、救援会では胸をなでおろしていたのだが。

田氏は、昨年の釈放後、ソウル市内で日本人救援会員と会い「金哲顕を早く釈放させなければ」と語っていた。

救援短信

◎11月30日の6周年集会にぜひ参加して下さい。新たな政治犯事件や孫さんの死刑判決に、強烈なブローを相手に喰らわせるため。

◎いい辛いですが、年末カンパ、ぜひよろしくお願いします。できれば十二月中旬頃まで。